★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第47回

『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』

1. 人生を3分の2終えて、、、

2月27日で59歳になった。いよいよ還暦イブである。

この歳になって、人生を振り返って思うことは、人生は長いようで短いということだ。俺は40代から50代にかけて何をしていたのか、ほとんど記憶にないのだ。時間は確実に過ぎていって、その時その時はつらかったこと、嬉しかったこともたくさんあったはずなのだが、記憶に蘇らなくなってしまっている。

その一方で、つまらない経験で、いつまでも昨日のことのように覚えていることはいくつかあるのだ。俺の場合は、つまらないことや嫌なことを昨日のことのように毎日思い出すのに、嬉しいこと楽しかったことはそうそう思い出せない。

これは俺の性格が悪いからなのか。

俺は 30 の時についたカウンセラーから言われたことがある。

「國友さんと話していると、自分の人生を物語にしているように感じることがあるんです。もう一度物語を書き換えることはできないですかね？」

確かに、何かのきっかけがあれば、物語を書き換えることもできるのかもしれない。しかし、俺は、書き換えようとしても、また昔のトラウマへと引き寄せられて、書き換えることができない悪循環に陥っている。

書き換えるのではなく、それを少しずつ変えていって、自分の中で折り合いをつけていくしかないのだ。

俺はもうアラ還。逆算の年齢になってきている。死ぬまでに何ができるか。常に死を意識しながら、生きる年齢になってしまっているのだ。こうなったのはいつからなのか。おそらくコロナの渦中にいつしか、そうなっていったのだと思う。

もはや、今となっては1日に一度は死ぬ時のことを考える。健康年齢は70代前半までだと言われるし、そのあとは体は大丈夫でもボケる可能性があるから、そうそう生産的なことはできないだろ

う。

さあ、あと 10 数年、何を目標にして生きたらいいのか。

2. 財布をなくす。

3 月の下旬のことである。自転車で映画館に向かおうとすると財布がないことに気づいた。家に帰って、あちこち探すのだが、どこにもないのだ。

おそらく、その 1 時間くらい前に近くの肉屋さんに買い物に行った時に落としてしまったのか。これは一つには長財布のせいである。俺は長いこと、お尻のポケットに入る折りたたみ式の財布を使っていた。10 代の頃から、財布を買うときは必ず折りたたみ式だったのだ。

母からは、「そんなところに入れていたら、誰かにすられるんじゃないの」と言われていたが、財布をお尻のポケットに入れておくと、お尻に感触があるため、確実に無くしていないことがわかるので、むしろその方がいいと思っていた。

しかし、この頃は長財布が流行っているとのことだったので、今年の誕生日に弟に長財布をリクエストしていた。弟から送られてきたのは、一万５千円くらいする紺色の長財布だった。

長財布は流石にお尻のポケットには入らない。それでジャケットのポケットやカバンにいれることになった。しかし、それまで半世紀にもわたって、お尻ポケットの財布を使ってきた俺が、急にそういう状況に慣れるわけがない。おそらく、ジャケットのポケットからずれ落ちてしまったのだろう。

お金を下ろしたばかりだったので、現金も相当な額入っていたし、カードもたくさん入っていた。財布も新品。総額 6 万円くらいの失費である。痛い！！！

その後 1 週間くらいは大変だった。クレジットカードの会社に電話して、新しいカードの手続きがいくつも続いた。この頃はどのカードにもクレジット機能が付いているケースが多いので、無くしたらえらいことである。

次に運転免許証の再交付。これに関しては、距離的には大したことなかった。昔は長岡天神まで行かなきゃいけなくて、紛失の場合であっても実習を聞かされて、時間がかかっていたという記憶がある。しかし、今は手続きをとればいいだけのことなので、あっという間に終わった。場所も京都駅近くなので、至って便利。

次はマイナンバーカード。一番時間がかかるのはこれで、まだ俺の手元に届いていない。２ヶ月くらいはかかると言われている。

銀行のカードも１つ１つ再発行してもらっているとその都度、手数料がかかり、手数料代だけでも馬鹿にはならない。

この頃はカードがどんどんスマホのアプリに変わっているので、そのうちカードはなくなり、全てアプリで OK ということになっていくだろう。もう長財布は買わない方がいいと思ったのだった。

幸い、春休み中だったので、時間のゆとりはあったが、一つこんなことがあると大パニックで凹む。しかし、これだけ探してないんだからもう誰かが拾ってお金も使ってしまったのだろうと諦め、１ヶ月が過ぎた。

ところが、5 月の頭に、突然マンションの管理会社から電話が来た。ひょっとして、近所からクレームが来たのか。今のマンションに移ってからはクレームが来たことはないが、前のマンションは壁が薄かったせいで、しょっちゅうクレームが来ていた。

恐る恐る電話に出てみると、「今ちょっとお時間いいですか？財布、落とされましたかね。マンションの管理のところに届いていたみたいなんですよ」

おー、無くして１ヶ月以上も経って見つかるなんて！！！

お金も抜かれていなかった。財布も新しいのはまだ買っていなかったので、幸いだった。カードの再発行代がかかっただけで、あとは戻った。弟がせっかくくれた財布なのだから大事に使わなく

ては！

世の中捨てたもんじゃないなあと思ったものだった。

このことを FB に書いたら、アメリカ人の女性から、Only in Japan！(日本だけよ！)というコメントが来た。日本は平和な国なのだ。誰も人のものなんて盗まない。

3. ニューエラを無くす！！！

次にものを無くしたのは、4 月下旬だった。無くしたのはニューエラの帽子である。俺はニューエラを気に入っていた。

俺は子供の頃から頭がデカかくて帽子は似合わない。入るサイズがないし、頭がでかいので、被っても上の方に乗っかっているだけとなるので、不格好である。

しかし、ニューエラのやつは帽子が深いためすっぽり頭に入る。インスタで写真をあげても好評である。これはいい！これまで子供の頃からのコンプレックスを一つまた解消できる！！！

去年１つ目を買い、２つ目は去年の冬休み。里帰り中に買ったのだった。

ところが、ある金曜日、知らぬ間に無くしてしまっていたことに気づいた。

おそらく、教室か、その後のカフェか、バスの中である。市バスの事務所に電話すると届いていない。カフェに電話しても届いていない。大学に電話すると、忘れ物を集めている学生課には届いていないけど、「教室に置かれたままの可能性はあります」というメールの返事が来た。

その可能性は高いだろうなあと思った。

俺は教室に忘れ物があると律儀に届けてしまうのだが、届けずに教室に置いたままにしている先生が多い。どっちみち盗まれないだろうし、掃除の人も置いたままである。

とは言うものの、せっかくお気に入りのニューエラがなくなるのは悲しい。早速俺は通信販売で、新しいニューエラを買った。出てくるかもしれないから、前のやつとは違った色のものである。

案の定、翌週行ってみると、教卓の中に入っていた。一瞬教卓にあるように見えなかったのだが、ビニールの影に隠れていたのだ。

おー、嬉しい！！！

このことがあったことで、その日は楽しい気持ちで過ごした。結局、このことがあったことで、俺はニューエラの帽子を三つ持つことになった。これからはニューエラが俺のトレードマークである。

4. DVD を無くした！！！

数日後、今度は授業で使うための DVD を無くしていることに気づいた。俺は神経質なので、授業で使うものをなくすなんてことはまずない。非常勤の身なので、ちょっとでも、周りに迷惑をかけるようなことをすると雇い止めになるという心配を常に抱えているため、むしろ神経質になり過ぎるくらい神経質になっていて、必ず、教室を出る前に一度は確認するのである。一時期はそれが高じて、強迫観念症になることもあった。

大学に電話したが、まだ届いていないみたいだった。おそらく教室のデッキの中に入っているのだろう。幸い、その DVD は予備があったので、無くしても大丈夫であるが、俺は潔癖症なので、こういうのがあると気に掛かってどうしようもなくなってしまう。

帽子の時もそうだったが、普通の人は忘れ物に気づいても、律儀に控室に届けたりはしない。だから、また教室に置いたままなのだろうと思っていたら、案の定、そうだった。

しかも、教室のデッキの中に入れられたままだった。すなわち、その１週間の間、デッキをいじった先生がいなかったのである。DVD なんか使わない先生が多いから、そのままになっていたのだろう。

そうそう、盗まれるということはないのである。

この忘れ物の事件が、ここ数ヶ月の最大の大き

な事件だった。他には大して何も起きていない。

5. 時間が潰れない。

最近の悩みは時間が潰れないことである。ゴールデンウィークはむしろ俺には地獄だ。何をしていいかもわからない。睡眠導入剤を飲んでも眠れないため、してはならないと知りつつ、多めに飲んでしまう。いつの間にか俺は仕事人間になってしまっている。したがって、仕事以外のことをすることができなくなっているのである。

俺は 20 代の頃はほとんど仕事をしていない。30 代になって、どうにか一人生活できる程度には仕事を始めたが、あの頃はまだ親にも頼っていたし、若かったし、仕事をたくさんしていなかったせいもあって、映画や水泳など趣味がメインのような生活だった。社会運動に参加したのも 30 代だった。

40 代になって、仕事が増え、一気に忙しくなったが、経済的なゆとりが出てきたので精神的には楽になった。40 代は俺にとっては学会と研究の 10 年間で、待望の単著も出し、それなりに充実していた。

50 代になると人生はあっという間に過ぎ去っていった。仕事の量が 40 代の頃に比べて多くなったわけではないが、やはり歳のせいなのか、疲れが残るようになっていって、社会運動もしなくなり、大阪に行く機会もめっきり減っていった。

今でも、その時その時で楽しいことはあるのだ。

2 月の誕生日にはドイツ人の先生と温泉にいった。その先生はまだ 31 歳で、息子くらいの歳である。しかし、すでに奥さんも子供もいる。マイホームも買って、これからローンが大変みたいだった。子供がいると 40 代くらいになったような気持ちになるのだとおっしゃっていた。

また教え子と何度か食事にもいった。

まずはかつての教え子で最近になって結婚した体育会の男子。彼はもう 32 歳だと言っていた。月日の経つのは早いものだ。今は彼の実家の京都のお菓子屋さんで働いているみたいだった。「奥さんの方が収入多いんです」と話していた。彼とは俺の行きつけの近所のイタリアンで話そうかと思っていたのだが、彼はもっと大衆的な店の方がいいというので、タイ料理の店に行った。まだ 30 代くらいまではオシャレ系の店よりも、がっつり食べられる店の方がいいのだろう。

奈良で仕事をしているかつての教え子は、まだ卒業したばかりで 23 歳くらいだと思うが、俺のことを結構慕ってくれていて、卒業してから会うのは２回目である。京都駅の東洋亭で洋食を食べた。１時間くらい並ぶことになったが、二人で話していれば時間は過ぎていく。その後、船岡温泉に行った。息子と一緒に風呂に入った気分だった。そのことをラインしたところ、「僕は信頼できる上司と風呂に行った気分でした」と返事が来た。

また男子学生たち二人と大学近くの二郎系ラーメンにも行った。そこは純粋に二郎系なのかはどうかはわからないが、とりあえず、二郎系らしきラーメンを初体験した。もやしがたっぷりのっているやつだ。

それからボクシングジムではバーベキューだった。若くてマッチョな連中ばかりなので、俺が最年長である。俺と同年代の男性も、2 人ほど、ジムにいるのだが、たまたまその日はお休み。なんとなく居場所がなかった。１時間半くらいで帰った。でも、ひとときマッチョ気分に浸った。

ジムには中学生くらいの男の子も来るのだが、みんな人懐こくて、俺にも話しかけてくる。俺はそういう子じゃなかったから、また少年時代を思い出して、悲しくなるのだった。

しかし、ゴールデンウィークは潰すのに難儀した。結果、毎日のようにマッサージに行くことになった。とりわけ 5 月 3 日から 5 日の三連休は地獄だった。1 日目はひたすら眠った。実はゴールデンウィークの直前にかつての教え子から、２つほどメッセージが来ていて、またかつての教え子たちと遊ぶことになるのかと思っていたら、両方ともキャンセルになった。若い子はそんなものだ。別に悪意があるわけでもないし、またそのうち付

き合ってくれるだろう。

もう俺は60だから、そろそろひとり遊びを覚えなきゃいけない。

これから、かつての友人は一人一人、仕事を辞めていき、いつのまにか亡くなっていくだろう。かつての教え子もだんだんと俺から離れていくだろう。そうであっても、それなりに幸せに生きるすべを探さなくてはならないのだ。悲しいけれど、人間は結局、孤独なのだ。

俺は常に気を張り詰めて生きている。緊張して生きている。仕事の時はそれがプラスに働くこともあるのだが、プライベートでもその緊張感が抜けないため、レジャーをしていても、心からリラックスすることができない。

それが俺の悪いところである。

6.『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』(金子由里奈監督、2023)

この映画、京都が舞台である。

原作者の大前粟生さんは同志社大学の卒業の人で原作の方は同志社が舞台になっているのだが、映画は立命館で撮影されている。大学名は具体的には出てこないが、俺の住んでいるところから近所の三条会商店街が撮影の現場に使われたみたいだ。

この映画に出てくるのは「ぬいサー」である。ぬいぐるみサークル。部員たちは、引きこもり系の優しい子達で、誰とも傷つけ合いたくないため、ぬいぐるみと話すことで自分の心のモヤモヤを消化しようとする。

この気持ちはとてもよくわかる。俺も長年1人で暮らしているとどうしても独り言を言ってしまう。誰かが部屋の中にいるかのように誰かと話してしまう。誰もいないのに。

一時期はそれが高じて、大変なことになったことがあった。ちょうど30歳の頃、さまざまなことで悩んで凹んで、夜中まで独り言を言ってしまい、マンションの近所の人からクレームが来てしまったのだ。

俺が心療内科に通うようになったのは、その時からである。

最初に行ったのはうちの近所の小さな神経科。その時の先生は当時もう60くらいの人だったからもう引退なさっているか、なくなっているかどっちかだろう。大変なヘビースモーカーだった。人の悩みを聞く職業だとこうなるのかと悲しくなったものだ。

閑話休題。

この映画では、主人公の男の子が本当にフェミニンな女の子のような男の子として描かれている。ゲイや同一性障害というのではないのだろうが、話し方もしぐさも全然男っぽい要素が全くない子である。

女の子の部屋に泊まる場面でも、二人がセックスをしたような形跡はなく、ただ服を着たまま添い寝。

彼が、「まだ童貞なの？」と友達から揶揄われる場面が出てくるので、まだまだ彼の周りにはセックスしたり、恋バナしたりがまともな大学生と思っている学生もいることは見てとれるのだが、その一方で、恋愛やセックスをしない人もいて、構わないのだという部分を提示しているところがこの映画の進歩した部分である。

実際、今の学生を見ていて思うことは、恋愛の相手がいる子の場合は昔よりもオープンであり、大っぴらに彼氏や彼女の話をする子は増えているように思える。おそらく、恋愛がコスパ化していて、そこそこのエネルギーで、そこそこに好きな人と付き合って、うまくいかなくなったら別れるというノリの子が多いのだろう。したがって、恋愛やセックスをそれほど真剣なものとは捉えていないのである。したがって、恋人のことを隠そうともしないし、別れてもあっけらかんとしている。

その一方で、全然恋愛や異性交際に縁がない子もいる。この映画でも、「恋愛なんかしなくてもいいんだよ」というセリフが出てくる。

俺たちが大学の頃に山田太一脚本の『真夜中の

匂い』というドラマがあって、これは女子大生 3 人組を描いたドラマなのだが、そのうちの 1 人が、大学の 4 年生になって、処女だということをまるで恥のように思って、悩む。そういう話だった。1980 年代は恋愛が強迫観念化していて、恋愛しない奴はできそこないという風潮があったのである。

今は多様性の時代。恋愛なんかしてもしなくてもかまわない。したいやつはすればいいし、したくないやつはしなくていいという時代になったのだとしたら、これは社会の成熟である。

この映画に出てくる若い子たちは、他人がセクハラされているのを見ても、自分のことのように心を痛めてしまう。そういう子が増えたのも好ましいと思うのだが、あまりにも優しすぎて、生きづらくなってしまっているのが現状なのだろう。

映画の終盤で、「僕は男だからそれだけで人を傷つけている」と主人公が泣く場面が出てくる。このセリフはちょっと女性に与しすぎているという感はしなくもなかった。

男性が、男性性が内包する暴力性を自覚し、女性に気を使うようになったのは成長だろうが、これは 1990 年代から男性運動の人たちは言っていたことだった。

女性から傷つけられたルサンチマンの俺からすれば、もう一歩踏み込んで、女性が内包している暴力性を訴えてもよかったような気がするのだが、まだまだそこまで行くには道は遠いのだろうか。

しかし、最後に「優しさからの解放」というセリフがでてくる。これは我が意を得たりの思いだった。

俺の人生で、フェミニズムやジェンダー問題と出会ったことは両刃の剣だった。

若い時にこの問題に目覚めた俺は、女性に気を遣い過ぎて、怒って当然のことをされても怒ることができなかったのである。女性に優しくし過ぎて、自分を傷つけてしまっていた。そのことが女性への憎しみを増幅させていった。

俺が学校の先生をしていて、いつだって思ってきたことは、男性と女性の関係は、先生と学生の関係に似ているということである。

俺たちが若い頃は、先生が絶対的な権力を握っていたため、不当なことをされても生徒は文句を言うことすらできなかった。俺たちが学生の頃の先生たちは今だったら懲戒免職になっても仕方がないことを平気でしていたのである。

ところが、今の時代は、先生の方は学生を傷つけるようなことを言ってはならないのに、学生のほうは平気で文句を言ってくる。ひどいことをアンケートに書かれることもしばしばある。「先生だって人間なんだよ、俺たちをなんだと思っているんだ！」と怒りたくもなる。とりわけ、専門学校で教えていた頃などは学生がお客さんなので、理不尽な思いをたくさんさせられたものだった。

俺は俺自身が繊細くんだったので、学生たちには人一倍気を使ってきたと思う。一時期はあまりにも学生のことを気遣い過ぎて強迫症になっていた。そのことをあるフェミニストカウンセラーに打ち明けたところ、「私らカウンセラーだって、相手をまったく傷つけないで仕事するなんてできないですよ。まして学校の先生なんかが誰も傷つけずにやっていくなんて絶対にできないです」と言われたことがあった。

もちろん、故意に傷つけることをしてはならないのだけども、ある程度は割り切らないと先生もやっていかれない。

女性との関係もまさしくそうで、いくらフェミニズムやジェンダーを勉強しているからと言って、何もかも女性の要求を聞くことはできない。時として、女性に厳しくならなくては、むしろ女性と付き合えなくなってしまうのである。

自分を優しさから解放しなくては！　これが俺のこれからの人生目標である。